令和３年度　桶川市歴史民俗資料館　展示解説シート

秋の祭礼とささら獅子舞

　ささら獅子舞とは、三匹の独り立ちの獅子によって舞われる芸能です。「ささら」とは、舞庭の四隅に立つ花笠役が手にする竹製の楽器に由来します。
　ささら獅子舞は、かつては豊かな秋の実りをよろこぶ村祭として、今ではともに生きる人びとを結びつける地域の行事として演じられています。

　コロナウィルス感染症の流行によって休止しているささら獅子舞の姿を展示にて紹介します。

小針領家のささら獅子舞

　「領家のささら」として知られるこのささら獅子舞は、北埼玉郡種足村（現加須市騎西）から伝えられたとされ、県北部及び東部の獅子舞と共通する姿を伝えている。
　舞は、氷川諏訪神社の境内に設えられた土俵（修場）の上で行われる。木太刀と六尺棒による「棒使い」の演技に始まり、続いて天狗に先導された大獅子（ホウガン）、中獅子、女獅子によって演じられる。

よみがえったささら獅子舞

　道具箱には江戸時代中期にあたる享保４年（1719）の年号が記されているとおり、古い来歴を伝えるこのささら獅子舞は、昭和34年（1959）に途絶えてしまった。
　これを惜しむ地区の人びとによって、平成11年（1999）から伝承活動を再開し、平成14年に復活をとげ、次第に演目を充実させながら今日に至っている。
　小針領家のささら獅子舞の復活にあたり、子供たちの参加に門戸を開いた。10年を超える伝承活動の中で、大人と子供、そして学校をともにする子供たちの交流が育まれていった。

松原のささら獅子舞

　松原のささら獅子舞は、かつて中秋の名月である旧暦八月の十五夜に奉納されていた。その後、新暦９月15日に、さらに平成16年からは10月初旬の八幡神社の祭礼に奉納されるようになった。今でも、松原の古老は、秋の祭礼を「十五夜」と呼び習わしている。
　現在伝承されている舞は六切の場面による。舞の姿は、低い姿勢で舞庭を踏みしめ、身体を大きく反らす力強いものである。

古風を伝えるささら獅子舞

　舞を先導する宰領（さいりょう）は、赤面を着けて、念入りに舞庭を清め、女獅子、中獅子、大獅子の三頭の獅子の拝礼を導く。
　獅子とともに舞い遊ぶ「ソンライ」「トッピーヒャ」などの群舞では道化の面に替える。この姿を「さるばか」とも呼んでいる。
　獅子舞の奉納の最後には、ふたたび赤面をつけた宰領を先頭に社殿をめぐって拝礼する。このような所作は、神事芸能であるささら獅子舞の古い姿を伝えている。

道化の面

前領家のささら獅子舞

前領家地区は川田谷のほぼ中央にある。江戸時代に川田谷に陣屋を構えた旗本牧野氏によってささら獅子舞が盛んになったといわれ、獅子の装束には牧野家の家紋をつける。

ささら獅子舞は、王子稲荷神社境内の集会所を中心に営まれてきた。かつては、10月８日を中心として、王子稲荷神社、山王社、長久保稲荷神社など村内の神社を巡って舞が奉納されていたという。舞は、宰領の先導によって、12切れの場が順次演じられる。

若者が伝える前領家の伝統と暮らし

前領家では、家の長男はささら獅子舞の仲間に入り、これを演じる伝統があった。現在でも、地区の若者は「新習い」としてその継承に参加している。

若者は、獅子舞をとおして地区の一員としての自覚をたしかなものとし、やがて、家庭をもち、地区を支えていく大人に成長していく。

―宰領（さいりょう）の衣から―

ささら獅子舞の頭を横から見ると鼻が長く、角を立て、鳥毛をたなびかせる姿は龍の形象にも通じる。前領家では、舞を導く宰領の衣装に大きく龍の姿が描かれている。

想像をたくましくすれば、ささら獅子舞は、秋の実りを確実にするために、風雨をつかさどる龍神を招いて和ませる行事であったともいえる。

龍が描かれる前領家の羽織

三田原のささら獅子舞

三田原のささら獅子舞は、柏原の八幡神社の獅子組によって伝えられてきたが、後にともに氷川神社の氏子である三ツ木と田向の人びとを加え、10月半ばの祭礼に奉納されている。

舞は、宰領の拝礼に始まり、法眼と後獅子の２頭の雄獅子が雌獅子をめぐっていさかう物語を十二の場面として演じている。

平成に至って子供たちも舞に加わり、地区全体の行事として受け継がれている。

―宰領の衣から―

羽織には、男女一対の猿と桃の実が描かれている。夫婦円満、子孫繁栄を願う絵馬には、しばしば「桃もち猿」が描かれている。宰領の衣にこの図柄が描かれているのは、この芸能が子孫繁栄と豊かな実りの祈願であることを暗示している。

神官姿の猿が持つ御幣の形から、鹿島神宮のお札を配る神主の姿を表していることがわかる。江戸時代、「鹿島のことぶれ」といわれたお札を配る神官がおり、その姿を芸能とした「鹿島踊り」が流行した。

三田原のささら獅子舞にも、鹿島のことぶれや鹿島踊りの影響が及んでいたと推測される。

三田原の羽織には猿が描かれる

三田原万作

三田原の秋の祭礼では、獅子舞の合間に万作が演じられる。万作とは埼玉県の平野部に広く伝えられてきた手踊りである。

三田原万作連は、万作本来の姿をよく伝え、他の地区では伝承が途絶えつつある「口説（くどき）」や「伊勢音頭」といった演目をしっかりと演じている。

肩脱ぎにあでやかな襦袢を見せる伝統的な姿で踊る演目には、かつて行われていた万作芝居の所作が伝えられているという。